

特別寄稿

医療看護研究33 P. 1-13 (2024)

「忘れられた」現実を捉える社会調査

Social Research Capturing the “Forgotten” Reality

轡田 竜 蔵¹⁾
KUTSUWADA Ryuzo

I. はじめに

1. 質的社会調査に関わる研究・教育の経験から

本稿は、順天堂大学第19回医療看護研究会（2023年3月3日）における講演内容を整序したうえで、若干の補足をしたものである。

筆者は医療・看護学の専門ではないため、講演の依頼を受けた時には、何かの間違いではないかと思った。専門は社会学である。勤務先の同志社大学では地域社会学や質的調査の研究法に関する講義を担当しており、若者論とローカリティの文脈から社会学の諸課題に関わる研究を続けている。なぜ自分に講演が依頼されたかを尋ねると、筆者の社会学分野における論文「サイレント・マジョリティを思考するということ」(轡田, 2018) を読んで興味を持っていただいた先生からの依頼であるという。看護学でもインタビューをベースにした論文に取り組む場合が多く、質的な社会調査の根本的な考え方に変わりはない。本稿では、ディシプリンごとに標準化された考え方を超えた観点から、質的な社会調査の研究・教育の方法について考えるきっかけになることを期待して、問題提起を試みたい。

筆者の単著である『地方暮らしの幸福と若者』(轡田, 2017) は、広島都市圏の自治体（地方のまち）と、そこから離れた中国山地の自治体（地方のいなか）の2つの自治体を調査地として定め、質的調査と量的調査を組み合わせた社会調査に基づき、地方の実態をそこで暮らすことを選択した若者の視点から考察したものである。社会学では、質的調査を得意とする者と、計量調査を専門にする者が分かれる傾向にあるが、筆者自身は質的調査に軸足を置きつつも、計量調査にも関

わり、両者を混合させた調査方法を工夫してきた。

『地方暮らしの幸福と若者』での調査は、まず、住民基本台帳からランダムに抽出された対象への郵送法での大規模な質問紙調査を行ったあとで、その調査内容とタイアップするかたちでインタビュー調査を行った。インタビューの場面においては、冒頭で郵送調査と同じ質問紙に回答してもらったうえで、その回答理由を尋ねるといふかたちで半構造化インタビューを行っている。同じ調査内容に関して、計量調査とインタビュー調査を並行して行うことによって、お互いの足りないところを補うことができるメリットは大きい。

筆者は普段の大学教育でも、教員がお膳立てをするのではなく、学生自らが自分の問いに沿って社会調査を企画して実施できる能力を育てることを大事にしている。「社会調査実習」という授業は、前任校から数えて19年間連続で担当している。ここでは、一つの共通課題のもと、10数人全員が分担してインタビュー調査を行い、そのデータをもとに分析し、250ページくらいの報告書を毎年作っている。講義科目に比べて予測不能な部分が多く、非常に手間のかかる授業なので、持ち回りの担当としている大学が多いが、筆者は単独で継続的に担当している。ちなみに、この「社会調査実習」という科目は、2003年に導入された社会調査士資格制度のもとでの7種類の科目のうちの一つである。全国の社会学を学べる大学では、だいたいこの一般社団法人社会調査協会の「社会調査士」を取得することができる。順天堂大学でも国際教養学部で、この資格制度が導入されている。

以下で述べる筆者の質的社会調査の考え方は、上野千鶴子氏が著書『情報生産者になる』(2018) のなかで、「うえの式質的分析法」とよんでいる方法に近く、それをアレンジしたものである。というのも、筆者は

1) 同志社大学社会学部社会学科
Faculty of Social Studies Department of Sociology, Doshisha University

上野氏が東京大学に着任された年の最初の学部ゼミ生であり、直接にこの方法について学んだからである。1990年代半ばは、社会調査士資格制度が導入される前で、東京大学の社会学科でも、質的な社会調査法の手順を体系的に学ぶ授業がカリキュラムのなかに用意されておらず、みんな我流でやっていた。そんななか、上野氏は、KJ法を用いたインタビューデータの分析メソッドについて、単位にならない番外編の授業を企画し、私を含め5人くらいがそれに参加した。上野研究室で、終電を超える時間帯まで少人数でみっちりインタビューデータに向き合う、なかなかハードな体験であった。現場の論理よりも、社会学者の理論の文脈のなかで語ろうとしがちで頭でっちな東大生であった自分にとって、一つ一つのインタビューの語りの文脈を多角的に読み込み、そこから情報生産をしようというボトムアップ思考の訓練は、多少効率が悪くても、新しい世界を開いてくれるものだった。

『情報生産者になる』は、問いを立てるところからプレゼンの仕方まで順を追って丁寧に論じられているので、質的調査で得られたデータを扱う研究・論文指導において役に立つ。社会学にはいろんな方法があるが、筆者のゼミは、「インタビューのプロを目指す」というのが受け入れの条件になっており、全員が社会調査実習に参加し、「うえの式質的分析法」の考え方を学ぶ。その上で、人に与えられたフィールドではなく、問いに沿ったフィールドを自分で開拓し、自分で取ってきたオリジナルのインタビューのデータを基に分析して卒業論文を書くことが必須になっている。

医療分野でも、「うえの式質的分析法」を応用している方もいる。上野氏は東京大学を退職後に、立命館大学に特任教授で数年在籍していたが、その間に、社会人の看護学の方が受講されており、その方が「うえの式質的分析法」の実践について執筆した本^{注)}が出版されている。興味がある方は参考にされると良いと思う。

注) 上野千鶴子監修、一宮茂子、茶園敏美編 (2017) 『語りの分析 (すぐに使える) うえの式質的分析法の実践』。立命館大学生存学研究センター。

2. もう一步踏み込んだ調査をするために

以上のような筆者の質的社会調査に関わる研究・教育の経験を踏まえ、本稿では、昨今の社会環境を踏まえ、どのように質の高い社会調査に基づく研究を活性化していけばよいのかについて考察してみたい。

質的な社会調査をめぐる社会環境は大きく変化している。社会調査士資格制度の導入の影響で社会調査教育が活性化し、社会学分野では理論研究よりも実証研究に軸足を置いた研究が活性化する傾向にある。それ自体はとてもよい傾向である。

だが、その一方で、人々の個人情報保護に対する意識の高まりや、金銭的・時間的コストの大きさから、安易な社会調査を実施することに対する風当たりも強くなってきている。特に、人を対象とした調査研究に関する倫理審査の制度化と、それに関連した学会・大学の研究・教育のコンプライアンス強化の流れ等の影響で、自由な社会調査が困難になっている側面もある。

質的調査に基づく学術研究をみても、形式的なルールの共有は進んでいるが、論じている対象の実態や意識はそっこのけで、研究者の主張を予定調和的に展開しただけではないかと思われる論文が少なくない。こうした論文では、当事者の語りは「モデルストーリー」のなかに当てはめられただけで、科学的な分析の過程が見えない。質的データを扱う形式的ルールは守っている論文だとしても、よく読むと質的調査データはアリバイ程度にあげられているにすぎず、調査をする前と比べて新たに分かったこと、インタビューというコミュニケーションを通して新たに生産された情報は何なのかが判然としないことがある。さらに突っ込んでみると、最初から大体何を言おうか予想されるような人にアプローチしているだけ、あるいは、理解可能な話だけを断片的に拾って、最初からわかっている話に自分の解釈枠組みを都合よく当てはめているだけという場合もある。

もう一步個々の人々の生きる現実を踏み込み、質的な社会調査の魅力を発揮するにはどうしたらいいのか。本稿では、以下3つの論点について考えてみたい。

第一に、サンプリングの問題。インタビュー調査は、ランダムサンプリングで調査対象を選ぶ計量調査とは違い、母集団のなかから、その多様性に注意しながら、調査対象者を選択する。だが、どうしても、この母集団の中で近い対象が優先されがちになってしまう。それと同時に、母集団の中に含まれるにも関わらず、縁が遠くて、ちょっと解釈が難しいタイプの人については、見ないことにされてしまう。そのようにして、実際には調査対象にならないような人たちのことを、ここでは「忘れられた人たち」とよぶこととする。どのようにすればこうした調査対象にアプローチすることができるのか、その方法を考えてみたい。

第二に、インタビュー時の問題である。自分の強い解釈枠組みがあって、それに従って質問を重ねていく。だが、調査対象者は、自分が想定もしていないような枠組みのなかで話し始めたりする。そこで自分が「もう、それ関係ないや、聞かないようにしましょう」といった対応をすると、結局「モデルストーリー」に収まってしまう。調査対象者自身も「モデルストーリー」に合わせがちで、必ずしも自由にすべてを話すわけでもない。そうしたなか、質問に対して、想定もしていないような枠組みでの話が出たとしても、可能な限り、話の文脈の多様な要素に耳を澄まし、これを拾っていく必要がある。これを「忘れられた声」の問題とよびたい。

第三に、データセットはできていて、さあ分析をするぞという段階における問題である。分析にあたって、自分の理論の枠組みがあって、それに沿って仮説検証したいというのがしっかりと定まっているのは良い。ただ、それに沿って解釈をするだけにとどまると、意外性がなく、つまらない記述になってしまうことがある。もう少し分析を丁寧に行うと、違う視点に出会うことができるのではないか。これを「忘れられた視点」とよぶことにする。そして、ここで役に立つのが「うねの式質的分析法」(上野, 2017) のメソッドである。

「忘れられた人たち」「忘れられた声」「忘れられた視点」。以下では、これら3つの「忘れられた」現実を捉えるにはどうしたらよいかについて、順に考察してみたい。

Ⅱ. 調査対象サンプリングの問題: 「忘れられた人たち」にアプローチする

1. 「肩書き」に頼らない社会調査

まず、「忘れられた人たち」の問題について。研究対象となる母集団を設定しても、実際の調査対象は、どうしても理解可能な近い人たちばかりにアプローチしがちになる問題である。もう少し多様性のある人にアプローチしたいと思ってもできないのはなぜなのだろうか、というところから考えてみたい。

ここでいう「忘れられた人たち」という言葉について、筆者は、20世紀半ばに活躍した民俗学者の宮本常一氏の本のタイトル『忘れられた日本人』(初出は1960年)の視点を意識している。宮本常一氏は全国津々浦々、行った所がないくらいに旅をした民俗学者で、当時多く存在した、学校に行っておらず、文字を書けないようなお年寄りたちにアプローチしている。そういう人たちに聞き取りをして、文字として残らない地

域の伝承を聞き取っていた。宮本氏は『忘れられた日本人』のなかで、地方に暮らす人たちの現実というもの、アカデミズムの世界の中で全然見えていないという問題を提起している。その原因は、大学の立地が首都圏、あるいは筆者が住んでいる京都もかなり多いが、大半は三大都市圏に集中していることである。そうするとどうしても身近なところでサンプリングしようとするため、そこから離れた地方の周辺地域に暮らす人が視野に入りにくくなる。こうしたことは、筆者が関わる若者研究を始め、多くの研究にバイアスを与えていると考える。

また、「忘れられた人」の問題について、学歴論や階層論の側から「分断」という概念を通して提起しているのが、大阪大学の社会学者、教育社会学や階層論が専門の吉川徹氏の『日本の分断』(2018)あるいは『学歴分断社会』(2009)という本である。この吉川徹氏が、ある学会の場で「皆さん、この1カ月の間、高卒、あるいは中卒、専門学校卒の人とじっくり1時間くらい話したことはありますか」という質問を投げかけている。これを社会学の研究者仲間の中で問うたら、なるほど、みんな自分の会った人は大卒もしくは大学院卒ばかりで、高卒で就職している人と対等な立場でじっくり話をした経験のある人はほとんどいない。それにもかかわらず、研究者は、しばしば、統計やメディア表象だけを見て、そうした人々が幸福であるとか排除されているとか、ろくに話したこともない属性の人のことをあたかもよく見知っている人であるかのように語る。日本の現役世代、20代から50代までの人口構成を見てみると、半分は中卒、高卒、専門学校卒が占めるのだが、これらの層を調査対象にした質的研究の割合は少なく、そのリアリティに迫ることができている仕事は希少である。まさに「分断」線の向こう側にいる人たちは「忘れられている」というほかない状況になっている。

これは、質的社会調査のサンプリングは、調査者の人間関係を起点にして選んでいくために、調査者から「遠い」対象にアプローチしにくいという問題が根底にあるわけだが、そうになってしまう背景には、まず、研究者のフィールドとの関わり方を反省的に考えてみる必要がある。

まず、第一に、学務や教育業務の負担が増えている昨今の大学教員の日常を考えると、宮本常一氏のように半分以上旅に出ているみたいなスタイルで仕事をすることが難しくなっているということが挙げられ

る。「遠い」対象と関係性を築くには、その前段階として時間をかけたフィールドワークが必要だが、月に何度かしかない休みでそれを行うのは難しい。社会学者の参与観察のマスターピースの多くは、20代の大学院生時代に行われたもので、中年以上の社会学者によるものは少ない。昨今の大学は、効率よく論文を量産すべしという規範によって煽り立てられ、フィールドワークにかける時間を確保できなくなっているのは問題で、この点について関係者は知恵を絞る必要がある。

第二に注目したいのは、多くの研究者は、組織の役割を抜きにしてフィールドと関わる機会が少ないという点である。特に大学や研究機関の職位を得ている場合は、そうである。組織の「肩書き」を利用して、自治体に調査依頼のアプローチをしてみたら、いきなり行政のトップクラスの人が対応してくれることもあったりする。例えば、「自分は同志社大学で地域社会学を教えています」と言うのと言わないのでは、行政の人の態度などが違ってくる。ところが、一学生がいきなり市役所にメールを送って取材を申し込んでも、面倒臭そうに扱われるだけということが多いであろう。そういう状況があるため、どうしても「肩書き」というのは利用しがちであるし、逆に民間の人の側から、「肩書き」のある研究者を誘って課題解決型の社会調査（アクション・リサーチ）が始まる場合もある（平井，2022）。

だが、「肩書き」をもってフィールドに出ていくと、当然ながら、それに対応した「肩書き」のある人ばかりが向こうから出てくることになる。その結果、大学教員は、組織とか集団のど真ん中にいる人たちばかり会うことになりがちである。例えば地域調査においては「この地域は素晴らしい」「先進的な取り組みをしていますよ」といった調子のいい話ばかりを聞かされて、すごいなと思って帰っていくことになる。ところが、学生のインフォーマルなつながりから知り合った人、その地域の出身者で特に何の肩書きのない人から、地域の現実について尋ねると、地域の有力者とは全く異なり、地域に対する評価も「全然駄目だ」「腹の立つことがいっぱいある」とネガティブな話がポンポン飛び出す。つまり、どうやって地域の人と知り合ったのか、その出会いのルートによって全然印象が違ってくるといえることである。

「肩書き」を背負った組織的な立場から対象にアプローチしていくと、どうしても、とても人間関係の豊かな人、ネットワークの多い人、Facebookで500人ぐ

らい友だちのいるような人などと知り合いになることになる。だが、その一方、それこそほとんど友だちがいないとか、地域に住みながら地域活動に全く興味がないというような人にはほとんど出会わないという問題がある。

こういう地域の片隅を生きる無名の人々が、実は最も接点をつくりがたい「忘れられた人々」である。「肩書き」を押し出せば押し出すほど、それが高いハードルになってしまうというところがある。現実には、こういう人たちのほうが人口的にはマジョリティである。こうした調査対象になりにくい人たちは「サイレント・マジョリティ」の存在を、調査対象の選定のさいに気に留めておきたいと思う。

例えば、地域活動に積極的に参加しているか、あるいは、地域社会の問題に関心あるかどうか、というような質問紙調査を行った時に、本当に関心があって、さらに実際に活動もやっていると回答する人は、計量的にみると、ほんの一部分しかいない。特に政治や社会には関心ないし、地域活動についても、お祭りをやっている時にちょっと行くくらいの人々がマジョリティであり、この点はコミュニティが強そうな田舎であっても同様である。そういう人たちの個々のリアリティをきちんと捉えないと、地域の調査をやっても大半の人を「忘れてる」ということになるのではないだろうか。

2. 何のための倫理審査か

もう一つ、「忘れられた人たち」にアプローチしようとする粘り強い社会調査がやりにくくなっている原因について考えてみたい。それは昨今の大学での調査倫理の審査の問題である。他分野の先生方と話していても、この問題が話題になることが多い。「人を対象とする調査」についての倫理審査のプロセスが厳格化されて、ネガティブに言うと無駄に面倒くさい状況になっている。これは、社会全体のコンプライアンスを重視する動きに対応している。つまり、こんなに調査が面倒臭いと、もう少し一歩踏み込んで突っ込むような調査をしたくてもできなくなっている現状がある。例えば、とても有名なフィールドワークの教科書を執筆している社会学者の佐藤郁哉氏は、大学院生時代の調査をベースに暴走族の調査をしてエスノグラフィとしてまとめたことでよく知られている（佐藤，1984）。この本は、今の時代の大学組織のなかで書けるのかという問題がある。暴走族に「調査協力のため

に同意書、一筆書いてください」と言った場合、素直に対応してくれるだろうか。「おまえ、警察か」とまず言われるのではないか。

もちろん、調査倫理に関する審査プロセスが必要ないと言っているわけでは決してない。しかし、できるはずの調査も、形式的な手続きが優先されることによって、誰も得しないような結果というのを生んでいるのではないか。ますますコンプライアンスが厳しくなっている状況の中で、無意味に社会調査のハードルをあげてしまわないように、乗り越える道を考えていかなければいけないと感じる。

調査倫理というのは、研究者や組織人であるあなたを守るためだというようなことを言われることがある。だが、本来、調査倫理というものは、第一に、調査対象者が傷ついてしまうのを防ぐため、調査対象者を守るための倫理というのが本来の意味であるはずだ。そのため基本的には、調査者との関係を信頼して、調査対象者が協力に承諾さえしてくれれば、問題は無いはずである。書類は調査対象者から求められれば出す必要はあるだろうが、調査者の組織などに出すために調査対象者にサインをしてもらうようなものでは本来にはなかったはずである。だが、学内で委員会を作って、必ず委員会に通さなければいけないという流れのなかで変化してきた。その過程は、当然だと思えば気にならないという人ももちろんいるが、学問分野によって調査倫理の考え方はかなり幅があり、大学全体で専門外の倫理審査などを行う局面において、少しおかしなことになってしまうことが多いと聞く。専門外の教員が審査にあたって過剰に厳しい意見を出したり、または時間がかかり過ぎて調査活動を妨げてしまったり、というケースもあるという。社会学のインタビューなどは、急にインタビューができるような状況が発生して、「明日来てください」と突然連絡があり、「じゃあ、行きます」といった感じで進んでいくところがあり、そうした自由で臨機応変な動きができる余地を残しておく必要がある。

社会調査を不可能にしてしまうためのネガティブな倫理審査が増えてきた帰結として、過去のようにディープで豊かな社会調査の業績が生み出しにくくなってしまったら残念なことである。こういうところをクリアすれば実際に調査ができるという、ポジティブな方向にもっていく調査倫理にしていく方法を考えなければならない。そうでなければ、ここで「忘れられた人たち」とよんだ「遠い」対象、自分からコントロー

ルできないような対象のところ飛び込んでいって、そのリアリティを捉えようとする調査は、なかなか難しくなってくるのではないか。あるいは、社会調査教育を通して、学生・院生の調査マインドを高めることにはならないのではないかと危惧している。

3. 「遠い」対象にアプローチするための工夫

筆者自身、自分にとって「遠い」対象にアプローチするための工夫として、実施していることについて述べる。

「社会調査実習」という担当科目では、まず調査対象や調査テーマの選択肢を広げるために、フィールドワークを行う。もちろん、指導教員である私が企画するフィールドワークもいろいろと行う。だが、それよりも面白いのは、学生自身も色々なネットワークを持っていることで、アルバイト先とか家庭とか地域の関係で、いろいろ面白い人間関係を持っていて、その情報を集めて生かす可能性を考えるプロセスである。

調査を始めるにあたり、調査に参加している学生一人一人がどういう社会に関わっていて、具体的にどういう人が調査可能かについてリストアップする。まず、参加学生たちのインフォーマルな関係性に関する情報を集める。例えば、消防士にインタビューしたいという学生が一人いたとしても、いきなり消防士の知り合いはいない。いないとなると、自分で消防署に電話するのも無理だということで、とてもハードルの高い話になってしまう。しかし、調査員が十何人もいたら、消防士の知り合いがいる確率が高くなる。例えば、ある学生Aさんが消防士の知り合いをリストアップして、消防士に興味がある別の学生Bさんがその人にインタビューを希望すれば、調査ができるようになる。このように、インフォーマルな関係性を生かしながらかつていく方法が役立つ。

この他、先ほど指摘した「肩書き」の問題である。全く知らない地域に入っていく場合は、筆者も市議員等の地域の有力者、あるいはNPOをやっている人など、そういうど真ん中の人たちにまずアプローチし、そこから紹介してもらうことがある。「肩書き」のある人から入るしかない。しかし、そこから芋づる式に、可能ならばなるべく遠くへ行こうとするのがポイントである。先述の拙著『地方暮らしの幸福と若者』のインタビュー対象を広げるにあたって、その点を第一に心がけていた。具体的には、インタビュー対象者で、信頼関係ができた方に次の調査対象者を紹介して

もらうというやり方である。1時間半なり2時間なり、じっくり話をする。それによりどんな感じのインタビューか、何を知りたいのか、パーソナリティーも含めて分かってもらうことができる。インタビュー直後の段階が一番打ちとけた状態であるので、そのタイミングで「こんな感じの調査なんだけど、誰か知り合いませんか」というふうをお願いしてみる。それにより、調査者のことを何者か全く分かっていない状態のときに依頼するのはだいたい成功率が変わってくる。調査の前にターゲットを決めて、こんな人に取材したいから紹介してくれないかっていう依頼をすることは、相手に負担を与えてしまう。よく知らない人に自分の知り合いを紹介できないといった反応になると推察できる。

インタビュー直後のタイミングで依頼すれば、「こんな感じだったら、この人、いいんじゃない」と提案してもらえるとといった流れが自然に生まれる。実際、広島田舎の知らない街で、このような感じで、どんどん芋づる式に対象を広げていって、当初想定した以上に多様な職業の人に会うことができた経験がある。同じ地域に暮らしている人であれば、何人か間をおくだけで、「遠い」と思っていた対象に意外とあっさりアプローチできることもよくある。

社会問題・政治に関心のある人や、あるいは積極的に地域活動・社会活動に参加している人は調査対象になりやすいが、社会意識・価値観に関する計量調査の結果からは、それはごく一部にすぎないということがわかる。大体どのような調査をしても同じような結果が出る。この点、計量調査とインタビューを組み合わせると、社会の見え方のギャップがよくわかる。前述した「肩書き」を頼ったインタビューだけをやっていると、その語りの内容については間違いないとしても、この地域は活動的な人が多いという勘違いをしてしまう。このギャップについて、調査のなかで常に意識する必要があるという考えから、筆者は計量調査によって母集団全体を俯瞰しつつ、個別インタビュー調査で各ケースを掘り下げるという混合的な調査法の視点を大事にしている。

Ⅲ. インタビューの問題：「忘れられた声」を聴き取る

1. 想定外の展開があつてこそ

次に、第二の論点、「忘れられた声」をインタビューの場面でどう聴き取るのか、という話に移る。

インタビュー調査について、筆者は半構造化インタビューが中心で、ガッチリと一問一答形式の質問リストを用意はしない。ただし、これは全員に聞いたほうがいいと思われる重要な質問項目は、インタビューガイドとしてリストアップする。

それぞれの質問に対して、どのような回答パターンがありうるかという仮説については、事前にシミュレーションして、ある程度考えた状態で調査に臨む。しかし、そのどのパターンにも当てはめづらい形のデータが得られるほうが、むしろ多い。想定どおりにはなかなかならない。質問をずらした反応が返ってきたり、あるいは「は？何のことですか」といった感じで、ごまかされたり他の話にそらされたりというようなことも、しばしばある。こういった局面で、自分の元々想定していたいくつかのパターンに無理やり理解の枠組みをあてはめるようなことはしないほうがよい。面倒臭くなると、自分の理解可能などれかのパターンに丸め込んでいないだろうかというところを注意したい。想定外のインタビューの展開にがっかりするのではなく、思いもよらない方向に話が展開するなら、そこにこそ自分が「忘れていた声」がある、というふうにポジティブに捉えたほうがよい。インタビューの語りは「対話的構築物」であるという考え方があるが、調査者が設定した対話の文脈のなかで構築される部分だけにフォーカスするのではなく、調査者が設定したアジェンダに調査対象者が乗っかることができず、うまく構築されなかったことは何だろうかと洞察する必要がある。

自分の想定に無いパターンの語り、まさにこれが「忘れられた声」である。これをどう聴き取るかが大事である。そのプロセスは、自分自身と調査対象者との関係を反省しながら、語られなかったことの文脈を分析的に捉えていくことが大事である。

2. 「沈黙」の文脈を読み解く

このあたりは、先に紹介した『サイレント・マジョリティとは誰か』（轡田, 2018）という本の中で詳しく述べた。調査対象者に質問したが、想定した答えがうまく返ってこず、「沈黙」が起こるような場合、あるいは、こちらの聞いたことに対して反応が鈍い場合がある。調査者はそのような場合、まずは思ったように語ってくれない調査対象者との間に「壁」を感じてしまう。そして、その状況を合理化しようと、研究者はそのような人を「サイレント・マジョリティ」とし

て捉える。

例えば政治の問題、社会の課題の問題に関して、何も言わない人たち。これが「物言わぬ大衆」、「サイレント・マジョリティ」であり、調査者にとって、黒々とした顔のない存在に映る存在である。特定の問題状況とか社会課題について意見を求めても、YesでもNoでもない、ただ周りの意見に同調して反応しているだけ。特に社会問題に関することを尋ねたら、多くの人がこうなる傾向がある。

例えば、「今の政治について不満なことは何かあるか」とインタビューで問うてみると、大半の人は最近テレビで見て気になった話を受け売りで話すにとどまってしまう。社会的な話題を自分の価値観や経験と結び付けて掘り下げた深い話を拾えてこそインタビューの醍醐味だが、多くの人はニュースを深く考えずに消費しているだけだということがよくわかる。

そのような状況、すなわち「不満なことは特に思いつきません」と調査対象者が個としての意見を出せなかった時に、調査者はこの人たちは「サイレント・マジョリティ」だと認識する。こうした状況について、意識が高く、知識も豊富な専門家はもどかしさを感じる。しかし、そういう人たちとの「分断」があることは、よく考えれば当たり前のことである。現代社会が複雑な構造をなしていることがわかっているのなら、知識のある人たちがサイレント・マジョリティを一枚岩に扱っておしまいにするのは残念なことだ。調査対象者が黙ってしまう、それ以上に話が進まない状況を打ち破っていくにはどうしたらいいだろうかというところを考える必要がある。

実は、自分の解釈枠組みどおりに相手が答えを返せない場合、その事情は必ずしも、無知だけが原因ではない。語られない事情について、いくつかのパターンを考えてみる必要がある。例えば、被差別体験のような語りにくい問題について、どうアプローチするか。調査対象となった人は、自分からは言わないけれども、実はエスニック・マイノリティで、周りから聞いていると、マイノリティゆえの辛い体験をしてきたようであるというケース。あるいは、不登校の期間があったり、いろんな問題を抱えていたりすることをインタビューアは別の筋から知っているようなケース。しかし、実際のインタビューの場面でそのような話はなかなか出てこない。

この点に関して社会学者の川端浩平氏は、自身のインタビュー対象者（在日コリアン）が「自分は差別

を受けていない」と発言した経験を手掛かりに、これをどう解釈すべきかについて考察している（川端, 2013）。

まず、これを文字通り受け取るのではなく、対話の文脈のなかで解釈すべきだという対話的構築主義的な捉え方がある。どういう事情があって、「差別は受けていない」と語るのか。その事情としてはいくつかのパターンが考えられる。

例えば、客観的にはいろんな差別や暴力の被害者であったとしても、当事者はマジョリティを不安がらせないために、インタビューされるとそういうふう発言するというパターンがある。仮に、何か嫌なことがあったとしても、それを「差別」の問題として社会化して訴えなければならないという意識が無い。つらいことは、みんな人としてそれぞれあるため、自分の抱えている問題は自分で処理すべきであるという、基本的に、そういった個人化された考え方を持っている。そのため、もっと声を上げたいと言われても、黙ってしまう。「別に、そんなふうには、あんまり思わないです」と答えてしまうこともある。

第二に、個人の抱えている複雑な問題状況が妨げになるパターンである。家庭環境等、いろいろ語りにくい人間関係とか、これまでの人生の経験もあって、語りにくいというパターンである。インタビューアの質問を聞いていて、この人は自分の問題についてあまり分かってないだろう、一から説明するのも大変だと感じた場合、少し勉強してきた程度の院生などがやって来ても、説明が面倒くさいな、どうせ言っても伝わらないだろうと心を閉ざし、適当に話題をそらそうとする。インタビューアが大事だと考えるポイントと、調査対象者が大事だと考えるポイントがずれ過ぎている場合だ。これは、調査者と調査対象者の関係性、すなわちポジショナリティの問題である。

このほかに、前述のように、政治や社会の話はテレビの受け売りで話すような人の場合であるが、そもそも、そういう人たちにとっては、差別や暴力などという概念が身近ではなく、その話題に対する感度や知識が乏しく、考えたことのないような話なので、とっさには反応できないという場合がある。そのため、難しいことを聞いても、答えるためのボキャブラリーがなくて、「沈黙」してしまう状況である。こうした場合、「差別を受けていない」という発言を「実は差別なのだ」と捉えたほうがいいのか、別の概念で捉えたほうがいいのかは、語りをいくら深読みしても判定することは

難しい。他の調査データも含めて、分析者が状況を定義すべきところになる。こうした状況が一番多く、悩ましいパターンかもしれない。

相手が自分の想定した枠組みに乗らず、無理にそこに乗せる訳にもいかない場合、断片的な語りから、その事情を上記のうち1つに決めつけられるわけではない。研究者には、その都度状況を解釈し直していくことが求められる。また、インタビューの場面は、相手の状況を考え、失礼なことを言っただけとはいけないことを第一に考えながら進めていたとしても、人間なので勘違いすることはありうる。どのような事情で相手が思うように語ってくれないのかは、調査対象者となる人を長い時間かけて観察し、交流したり、いろんな関係ないことも含めてじっくり対話していくプロセスの中でようやく明らかになってきたり、誤解がみつかったりする。不意に分かることもあるので、自分自身の解釈を決め打ちせず、解釈の訂正可能性を残しておくということも大事である。この人、語らないなあと思っていたら、打ち解けてきたら急に語り出し、「実は、いろいろ、そう言えばあったわ」っていうふうに「沈黙」を破ることもある。つまり、「沈黙」の文脈は複数あって、「忘れられた声」を拾っていくのはなかなか繊細な作業であるということである。

しかし、ここで筆者がむしろ心配するのは、他者の「沈黙」に対して繊細でなければならないということあまり重く受け止め過ぎて、調査できなくなってしまう学生・院生が結構いるということである。私の院生時代には、ポジショナリティについての議論が活発で、当事者性の有無の問題について考え過ぎてしまって、調査する前に控えてしまう人が多くいた。確かに、特に若いうちに、自分の研究のフィールドに出向いて行ったものの全然相手にされず、「出直してこい」という類のパンチを食らうような経験があると、もうフィールドは怖くなってしまっただけでなくなってしまうのも無理はない。そうやって研究そのものを諦めてしまう若い研究者を多くみてきたが、残念なことだ。時間をおいて、もう一回フィールドに出直してみると、自分自身の研究のスタンスが変わっていたり、調査対象との関係性のあり方が深まったりして、その「沈黙」の謎は解ける可能性もあると考えた方がよい。社会調査を続けていくうえで必要な資質とは、ポジショナリティの問題も含めて、自分の調査実践を謙虚に反省しつつも、粘り強く調査対象者と関わっていくタフさ、ある種の柔軟さとレジリエンスなのだと考える。

IV. 分析過程の問題：「忘れられた視点」に気づくには？

1. 「忘れられた視点」を自動生成することはできない

3つ目の話として、分析過程の問題について考えを述べたい。

看護学ではグラウンデッド・セオリー等がよく使われ、ボトムアップ型のデータの分析過程の重要性について、常日頃から非常に意識されている方も多いただろう。これに対して、社会学は研究者によって方法が異なり、標準化したメソッドが共有されているわけではない。

理論志向の強い研究者は、学説史的文脈に自らの論文を位置づけようとしたがる。だが、実際にフィールドに出ると、その学者の学説を使おうとしても、その抽象度のままではインタビューデータとうまく噛み合わないことに気づくことになる。その意味で、生々しい現実から「ボトムアップ」に論理を読み解く訓練、目の前にいる人のしゃべっていることに則して考えるという経験は、早いうちにしておいたほうが良いと考えている。これに関する大学学部時代の筆者自身の経験は、冒頭に述べたとおりである。

ボトムアップ型の質的データ分析は、グラウンデッド・セオリー、その他いろいろ横文字の短縮した言葉で称されたくさんの方法が存在する。しかし、それらをAIにインプットしたら自動的に分析結果がポツと正解が出力される、このような知的生産の効率化の技術としてイメージをする学生がいるが、それは誤りである。「当事者の語り」の世界があったら、それと対峙する形で、分析する研究者の概念の世界というものがある。便利なIT技術を使って語りのデータを整序するのはいいが、質的データ分析において最も大事な過程は自分の頭をフルに回転させ、この2つの世界を往復しながら、両者を噛み合わせていくことである。この過程こそが分析の創発性を生み出すのであって、当事者の語りを効率的に分類整理してアウトプットすればいいという発想からは抜け落ちてしまう部分である。実はこれは計量研究の分析過程に関しても言えることであり、大事なポイントだと感じている。

そうした創発的な過程を重視する点が、「うえの式質的分析法」(上野, 2017)が、同じボトムアップな知的生産法でも、グラウンデッド・セオリーと少し異なっている点である。川喜田二郎氏が開発したKJ法自体は、元々発想法として考えられた、ワークショップ等で使われている方法だが、これを質的調査のデー

タの分析、知的なアウトプットの過程に活用したのが「うへの式質的データ分析法」である。インタビューデータの「当事者の語り」と「研究者による分析記述」の対応関係を可視化したうえで、インタビューデータを単に「語り」としてみるだけではなく、いろんな社会的変数との関係をも含め、多角的に分析を進めていく。この作業を丁寧に行うことで、予定調和的な分析ではなく、当初の自分の解釈枠組みとは違う視点からデータが見えてくることがある。これが第三の論点、「忘れられた視点」である。

人はそれぞれの「忘れられた視点」に、どうやって辿りつくのか。この点がまさに、『情報生産者になる』（上野, 2018）の冒頭部分に書いてある。情報を生産するためには、自分自身にとっての自明性の領域と疎遠な領域の中間のグレーゾーンを作り出す努力が必要だという話である。一方で自分が当然過ぎて考えないような領域があり、他方で、自分の日常の理解の枠組みでは無視してノイズとして扱いたくなるような領域がある。人の話を、当たり前過ぎるとか、縁が遠過ぎて、あんまり聞きたくないと受け止めると、情報は生まれない。

つまり、「忘れられた視点」は自動生成されるものではない。新しい視点に気づくためには、当たり前と思われるような領域、自明性が成り立たなくなるような状況にあえて身を置くというのが一つの方法である。日頃、例えば社会学者が社会学者同士の親しい研究コミュニティの中で常に話していたら、その中で使われる研究上の了解、社会のトレンドの理解の仕方等が、みんな同じような感じになり、新鮮味が無くなってしまう。しかし、全然社会学者がいない場では、普段と同じように話すわけにはいかない。こういう専門分野が違う人たちの間で異分野交流をすると、どうやったら相手に伝わるのだろうかという、普段は考えない視点から考えなくてはならなくなる。自明性の領域を縮小する、familiarなものをstrangeな状況に置くということの効果、すなわち馴質異化（じゅんしついか）という方法である。

第二の方法は、ノイズに耳を傾けることだ。自分と立場を異にする人、あんまりこの人の話、聞きたくもない、普段は注目しないというような人、しかし、そういう人たちの話をじっくり聞いてみると、そこに何か情報が生まれることがある。自分の理解の枠組みを広げるようなヒントがあるかもしれないということだ。これを、社会学者で小説も書いている岸政彦氏が、

社会調査の教科書のなかで、「他者の合理性を理解する」という言い方をしている（岸ら, 2016）。マックス・ウェーバーの「理解社会学」という概念があるが、他者＝自分の調査対象者に「共感する」ということではなくて、生きてきた環境も感じ方も違う、共感できないとしても、この人はどうしてこういうふうになるのだろうかとこの点について考える。つまりその人の行動と考え方の関係について合理的に理解するということであり、「他者の合理性を理解する」ということだ。

具体的には、政治的な話ではあるが、トランプ現象（トランプ大統領が支持を集めた現象）の合理的理解について、その支持者でもない立場から試みたアーリー・ホックシールドという社会学者がいる。日本ではロナルド・トランプは、とんでもない人だと思っている人が多い。実際、いろいろ排外主義的な発言も多い。ホックシールドの勤めるカリフォルニア大学バークレー校の界限も、とてもしべらるな環境のため、大学周辺にはトランプ支持者が全くいない。そうした界限から見ると、トランプを支持するのが、本当に不思議な状況にしか思えない状況である。

しかし、マクロに見ると、アメリカにはトランプを支持した人たちが半分いるという状況がある。その人たちはみんなどうかしている異常な人たちなのかというと、そんなはずはない。ちょっと近づいて話をきいてみると、そういうトランプ支持者という他者を排外主義呼ばわりするだけでなく、もう少し合理的に理解することができるのではないだろうか、とホックシールドは考えたのだ。

ホックシールドは、感情と社会との結び付きについて研究している社会学者である。有名なところでは『管理される心－感情が商品になるとき』（1983 石川ら訳 2000）という本を執筆しており、これは、看護学でも読んでいる方が多いだろう。看護師等の労働を分析するさいに使われる「感情労働」という概念を提出した研究である。

ホックシールドはトランプ支持者についても、その「感情」のあり方を捉えようとして、トランプ支持者が多数派を占めるルイジアナ州で調査に赴いている。ホックシールドにとってはアウェーな地域だが、そこに乗り込んでいったのだ。そして、トランプ支持者の人が、ある話題を言ったら涙が流れてしまう、そういうストーリーの型がある、感動する話というのがあるということに気づき、それを「ディープストーリー」

とよんでいる。感情と論理を媒介する、そのようなストーリーを発見して、そこからどうしてトランプが支持を集めるのかを理解していこうとする。このホックシールドの本のタイトルは『壁の向こうの住人たちーアメリカの右派を覆う怒りと嘆き』（2016 布施訳, 2018）である。パークレーから見たら「壁」の向こうの世界だが、ここをフラットな視点で、合理的に理解しようとする。これが、あえてノイズの中に飛び込んで、「忘れられた視点」を取り出してきた一つの例だと言える。

2. ヨコの分析

実際、どのようにすれば自分にとっての「忘れられた視点」の発見に至るのか。ホックシールドのような分析の達人ではなく、初学者であったとしても、ある程度の情報生産をするための手掛かりをうるためにはどうしたらいいのか。私は「うえの式質的分析法」を自分なりにアレンジして、「ヨコとタテ、ナナメの3段階の分析」とよんでいる。それを順に紹介したい。

まず、分析の前段階。半構造化インタビューを例に想像してもらおうと良いが、十何人とか何十人とか、インタビューのケースを積み上げたとする。共通する質問、たまに抜け落ちたりもするが、基本的には同じような流れで行った質問を十数ケース重ねていく。そして、そこから文字起こししたテキストのデータベースが目のある状態になる。上野氏は、必要がなければ文字起こしをしないというようなことも語っているが、筆者は多少鈍臭くても文字起こしのデータベースを作ってからインタビュー分析を始めることの効果は大きいと考えている。文字起こしのテクニックについては長くなるのでここでは省略するが、あまり手間のかからない方法で文字起こしをした上で、そのデータベースを目の前にするところから分析をスタートしている。

文字起こしのデータベースができたら、第一段階として行うのがケース分析である。これはExcelのイメージで、行ごとに1ケースのデータをまとめることで、ヨコの分析というふうによんでいる。個々のインタビューケースを総合的に理解することが目標となる。1人のインタビューの要点をつかむということがねらいだが、その際に何が一番重要かと言うと、まずはその人が、前述した「ディープストーリー」のように、その人の感情が動くのはどのような話題に言及したときで、どんな論理や概念をこだわってよく使い、何回も

繰り返し言及しているのかというポイントを、まず把握する。そのインタビュー対象者にとって何が重要なトピックなのかを、まず理解する。

その一方で、その調査者の側のリサーチクエスチョン=問いに沿って、データを分析する。これに関しては、インタビュー前から準備が必要である。調査対象者に関して、ただぼんやりとその人に会いに行って話をきくのではなく、マーケティング用語でいうところのペルソナイメージを徹底的に研究して、その人を事前にイメージするのだ。この人は子ども2人がいて、こんな地域に住んでいてこんな職業だから、こんなタイプの性格だろう、こんなことを言うんじゃないかという仮説を立てる。そして、それをまとめてみる。調査対象者に会っていない段階で、どんなことを言いそうな人が予想を立ててみるのだ。この段階で学生に討議させたりする。

しかし、実際に調査対象者と会ってみると、だいたいは予想外である。ペルソナイメージからずれたこと、あるいは全然異なった視点が出てきたりする。例えば、調査対象者はA、B、Cの三つに分かれると想像していたのに、実はBタイプはB¹とB²に分かれ、Cタイプではなく、Dタイプを想定したほうが良い、Eタイプもありえそうだから追加でインタビューしよう……というように、類型論的な仮説も変化する。こういう作業をきちんとやると、社会学的想像力が鍛えられる。今までの経験から、会う前からこの人はこんなことを言いそうな人だと思い込みやすいものだが、話を聞いてみたら裏切られる。そのポイントを意識しながらインタビューデータを分析・記述できる人が、新しい情報を生み出せる人だと考える。つまり、インタビューで得られたデータを見ながら、事前に想定したペルソナイメージ、モデルストーリーとどう異なっていたのだろうかを振り返って考えるのである。異なっていたら、それは、自分の思った通りにデータが取れなかったとがっかりするのではなく、ここにこそ視点が広がるチャンスがあると捉えることが大事である。

3. タテの分析

ヨコの分析=ケース分析が終わったら、次の段階に進む。ケース分析の段階で、一人一人のケースの「キャラ」をしっかりと把握したうえで、今度はタテの分析を行う。

半構造化インタビューをしたのであれば、例えば暮らし、住居とか家族とか趣味などの話は、人によって

濃淡の差こそあれ、それぞれ全員に聞いている。あるいは仕事の話、地域の話、キャリアや将来設計の話も全員に聞いている。それぞれのテーマごとに、例えば30人にインタビューした場合、その30人がどんなふうに語ったのかというところを抜き出して、すべてのインタビューデータが含まれる大きなデータベースから小さなデータベースを作る。

この作業は、まずは、話の流れの中で、当該テーマの質問項目に対応した語りの部分を大きなデータベースの中に見つけて、テーマ別の小さなデータベースに移すところから始める。次に、それだけではなくて、データベースをキーワード検索し、関係ある語りをマークし、その部分も移す。話題が前後することも多いため、仕事の話のところに急に趣味の話が出てきたりすることもある。そのため、そういうものも含めて抜き出し、個別テーマに関連する語りの一つの塊を作る。これを「フォルダ分け」の過程として説明される場合もある。このフォルダに入ったデータの分析作業、すなわちテーマごとの全ケースの横断的な分析について、『情報生産者になる』（上野，2018）ではコード分析と述べているが、筆者は「テーマ分析」のほうが伝わりやすいと考えて、そうよんでいる。

学生との社会調査実習では、ここでKJ法を活用している。ボトムアップにケースを分類して、趣味というものが、例えば、どのように語られるのかを比較したり類型化したり、相互関連を分析したりする。このあたりは、グラウンデッド・セオリーでも同じようなことを行う。ただ、先述のとおり、テーマ分析にあたっては、データの分類・整理自体が目的ではなく、語りのコンテキストを多角的に分析するなかで、当初の仮説からは想定できなかった「忘れられた視点」を発見する過程が大事なため、そうした部分に注目するように促すのがポイントである。

KJ法のマッピング作業の整理の仕方をみれば、その人が当事者の語りにどのように向き合ったのかが一見してわかる。そこで、やってはいけない2つの駄目な分析パターンがある。学生にプレゼンをさせると、必ずそれに近いものが出てくるため、あらかじめ想定しておく指のポイントが見出しやすくなる。

第一に、「大陸型」と筆者がよんでいるタイプの分析である。模造紙上のKJカードの配置を思い浮かべてみると分かると思うが、模造紙の上に大きな島が2つか3つくらいしかない、大雑把な分析のことを指す。自分の枠組みが強いタイプと言えり。理解の枠として、

これはきつと、AタイプとBタイプ、Cタイプに分かれるだろうという思い込みが先行して、それに当てはめているだけの分析である。そこに当てはまらない文脈の話があっても、「その他」として、隅っこにちょろちょろと貼り付けてあるだけ。これが大陸型の分析である。自分の理解、枠組みを押し付けているタイプの駄目な分析である。高い空から鳥の目で見えて、地表に降りようとしなない分析であるともいえる。

これと対極的な分析が、「瀬戸内海タイプ」、あるいは「多島海型」とよんでいるタイプの分析だ。これはまじめな人に逆に多いのだが、一人一人の話をしっかり聞いて、それをそれぞれにちゃんと受け止めるのだが、全体が見えてない。この話はこんな話、別の話はこんな話って、解釈はしているが、相互の連関がわからない。「だから何?」と尋ねると、「人生いろいろですな」、「それぞれです」と身も蓋もないことを答える。「さまざまな人がいますね」、「いろんな話がありますね」というところで分析が止まっている感じで、調査を通して全体として何を言えたのかが見えてない駄目な分析と言えり。これは、個々の調査対象を虫の目で仰ぎ見るように見ているが、俯瞰的な観点からその対象を位置づけることができなない分析であるともいえる。

4. ナナメの分析

第三段階目の分析が、ナナメの分析である。これが一番難易度は高い。例えば、先述の立命館大学の「うえの式質的分析法」（上野ら，2017）のマニュアルを説明した本のなかで、医療系の調査、生体肝移植のドナーに対するインタビューデータから作ったマトリックスが紹介されている。1ケースごとに1行が割り当てられ、列ごとに調査項目・調査テーマが並べられている。これをヨコに分析していけば「ケース分析」、タテに分析すれば「テーマ分析」である。例えば、すべてのケースについての「家族の関係」について、タテの列の情報を集めれば分析ができる。

ここで一歩進んで、ナナメの見方を考えてみる。例えば、タテの分析で、家族の話をしている人としていない人に分かれることがわかるが、ナナメに見てみると、家族の話をしている人には女性が多いというのが見えてきたりする。つまり、タテの同じ列のデータの束を分析するだけではなく、これを性別と絡めてみたらどうなるだろうか、女性だけにフォーカスしてみたらどうなるだろうか。家族の話だけでなく、親族の話

についても含めて考えるとどうなるだろうか。このように、データベース全体を見ながら、他の変数との関係も目配りするということだ。つまり、データベース全体をよく読み込む。この作業は、とても時間がかかる。1つのテーマに限って他は見ないというのではなく、他のテーマとの関わりにも広げて考えてみる。これが「ナナメの分析」であるが、『情報生産者になる』（上野，2018）では、「マトリックス分析」として論じられている。

実際、これらの分析を学生にやってもらおうと、どういうことになるか。社会調査実習という授業では、分析段階で学生に3回プレゼンをすることを課している。通年で、1週間に2コマもある授業なので、十分に時間がとれる。

1回目のプレゼンはケース分析＝ヨコの分析の検討のプレゼン。2回目は、KJ法を経たうえでのテーマ分析＝タテの分析のプレゼンである。テーマ分析のプレゼンのさいに、「このデータ、職業ごとに分けてみたら？」とか、「居住歴で分けてみたら？」とか「今の仕事のやりがいについての語りだけでなく、将来のキャリア観の語りも合わせて考えてみたら？」といった課題がこの段階で見えてくる。それを念頭に、3回目のプレゼンでは、ナナメの分析も含めて行い、それで報告書レポートをベースにしたプレゼンをしてもらう。KJ法ではなく、もう一回データ全体を読み込んだ上で、他の変数との関わり等を検討し、分かる範囲で、発見できたことを書くように要求している。

最初のケース分析については、学部学生でもそこそこのクオリティになる。特に若者を対象にした調査の場合、調査対象者との距離の近さをうまく生かし、下手な研究者がまとめるレポートより面白く、これはかなり面白い分析ができそうだ…と期待が高まる。だが、テーマ分析になると今一つ読み込みの甘さが目立ってくる。そして、マトリックス分析、たくさんの変数と語りの関係にまで視野を広げてレポートを書くという段階になると、研究経験のレベルの差が目立ってしまう。分析力というのは、データをボトムアップの手法で丁寧に見ることによって鍛えられるが、ナナメの分析まで行うとしたら、無数の変数のなかから、どういふ変数との関係に注目したらよいかを見抜く勘が必要で、それは理論的な引き出しをたくさん持っていないと難しいわけである。

そのように言うと、自分には理論的センスがないので、データ分析はやはり難しいと考える人がいるかも

しれない。だが、多少鈍臭くても、自分の問いの軸が強い努力家であれば、期せずして「忘れられた視点」に到達するというパターンがある。一つのインタビューのデータベースがあるとして、例えばジェンダー視点でデータベース全体を読みこみ、ぐいぐい徹底して洗い出してみよう、といったスタンスである。こういう過程について、『情報生産者になる』では「データをしゃぶりつくす」と表現されている（上野，2018）。理論的な冴えがなくても、全体をなめ回すように見るような、そういう執念深さがあれば、その過程で新しい視点が獲得されることがある。ただし、問いの軸の強さも、一朝一夕に身に付くものではなく、普段から鍛えておくということと、それを説明するための理論的な視点を幅広く学んでおくことが必要になるのはもちろんである。

V. おわりに：今よりも一歩踏み込んだ社会調査のために

最後にポイントを整理する。本稿では「忘れられた人たち」と「忘れられた視点」「忘れられた声」、これらの「忘れられた」現実を一歩踏み込んで捉えるためにはどうしたらいいかという論点について、筆者の研究や教育の経験から述べてきた。こうしたことについては、もちろん社会学や人類学の歴史のなかで議論が蓄積されている。

宮本常一氏の時代と今の時代とを比べると、「忘れられた人たち」という存在の意味は大きく変わっている。宮本常一氏の時代は、田舎の山間地で小学校も出てないような人たちの話を聞こうと思ったら、かなり時間をかけて会いに行き話をするというのをしなくてはならなかった。ところが今は、SNS等で、どういふところからでも発信するような時代になってきている。誰でも自分の思いなどを、いろんな経験をした人が発信できる「当事者の時代」になっているところがある。関係性を深めるという観点では、対面で行うに越したことはないが、遠隔地からZoomでインタビューすることも一般的になってきている。「忘れられた人たち」にアプローチする選択肢は広がっていると言えよう。

「忘れられた声」ということに関しても、当事者自身が発信する時代になってきた点が重要である。いろんな悩みを抱えた人、例えば不登校の当事者経験のある方が若者の「生きづらさ」を研究する社会学の研究者になっているとか、摂食障害を克服した方が社会学

者になって摂食障害を研究しているとか、このような事例が多くなっている。熊谷晋一郎氏は、脳性麻痺の当事者として、自身の感覚について研究して、当事者研究という立場を出して発信している。こういう時代において、他者との向き合い方というものも当然変わっていくだろう。

筆者の学生・院生時代、1990年代はフェミニズム、カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアリズムの理論等の流行などがあり、その過程で、調査倫理の問題に関する議論のレベルが上がったところがあった。そうすると、逆に調査しにくい状況が生まれる。安易に、例えば沖縄に行き行って話を聞きに行こうとすると、日本人として沖縄の基地問題をどういう立場で聞くか、そういうポジショナリティをしっかりと意識してないと、安易にフィールドに出向いたら駄目ではないかと考えてしまう。研究業績を出す前にそういう繊細な問題で悩み過ぎて、メンタルを病んでいく院生仲間も多く見てきた。

ところが先にも見たように、調査倫理のハードルの高さが社会調査をやらない言い訳になるというのは、本末転倒な事態である。調査倫理に関する論点を押さえたうえで、やはり他者と出会って話をきかないと「忘れられた視点」を発見することはできないので、何とか工夫して、いろんな声を聞き取っていこうという流れが強まっているように思える。実際、生活史やインタビュー等の社会調査法に関する読みやすい本も多く出た結果として、名人芸としてではなく、学部時代から段階的に質的社会調査のスキルを獲得できるよう教育がやりやすくなってきた。自分のフィールドに向き合って地道な調査をし、それをベースに社会学的な論考を書く研究者の割合も増えてきた。ただし、医療看護分野では、社会学分野よりも調査倫理のハードルが高く、必ずしもそうとはいえない現状もあるだろう。

このあたりについて、分野を越えた交流の中から、生産的な議論が発展するようになること、それぞれの専門分野の特性について理解を深め、それぞれが今よりも一歩踏み込んだ社会調査に基づく研究ができるようになることを願っている。

引用・参考文献

- 平井太郎 (2022). 地域でアクションリサーチ. 農山漁村文化協会.
- Hochschild, A., R. (2016/2018). 布施由紀子 (訳), 壁の向こうの住人たち - アメリカの右派を覆う怒りと嘆き. 岩波書店.
- Hochschild, A., R. (1983/2000). 石川准, 室伏亜希 (訳), 管理される心 - 感情が商品になるとき. 世界思想社.
- 川端浩平 (2013). ジモトを歩く - 身近な世界のエスノグラフィ. 御茶の水書房.
- 岸政彦, 石岡文昇, 丸山里美 (2016). 質的社会調査の方法 - 他者の合理性の理解社会学. 有斐閣.
- 吉川徹 (2009). 学歴分断社会. ちくま新書.
- 吉川徹 (2018). 日本の分断. 光文社新書.
- 轡田竜蔵 (2017). 地方暮らしの幸福と若者. 勁草書房.
- 轡田竜蔵 (2018). 第1章「サイレント・マジョリティを思考すること」. 川端 浩平(編), サイレント・マジョリティとは誰か: フィールドから学ぶ地域社会学. pp.19-42. ナカニシヤ出版.
- 宮本常一 (1960). 忘れられた日本人. 未来社.
- 佐藤郁哉 (1984). 暴走族のエスノグラフィー. 新曜社.
- 上野千鶴子 (2018). 情報生産者になる. ちくま新書.
- 上野千鶴子 (監), 一宮茂子, 茶園敏美 (編) (2017). 語りの分析 (すぐに使える) うえの式質的分析法の実践. 立命館大学生存学研究センター.